

第三回懸賞小説作品発表

入選

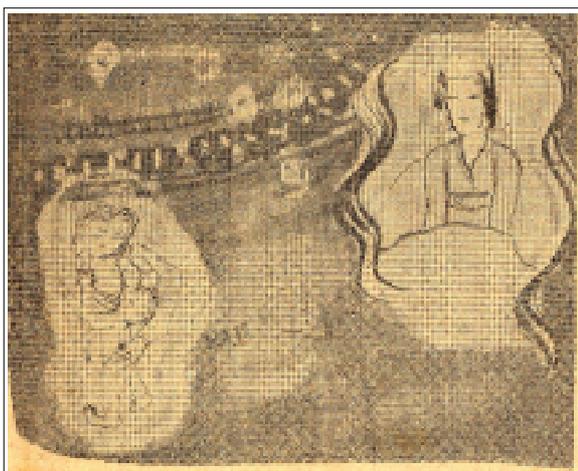
雪

後編

田中光二

(たなか踏基)

きたくなつた。無断でひとり姉に会いにいったことがある。姉の肌の白さは、この病気の患者にありがちな澄んで、病人の直覚力で研がれると美の概がちだったが、念を超越した。君の学生書入れを調べながら何故か君を強く魅了した。「女の人の写真が入っているかと思って…」と一重瞼を瞬かせながらいった。君はまた偶然とはいいながら、君の二十歳の誕生日と、姉の肺切除の大手術のあつた日が重なつたことに、何か宿命的な因縁さえ感じている。君は大学の寮にいても、母に出さなくとも姉に手紙を出すことを義務のように思っていた。姉は小言をくだくだといつてよこした。君はそんな自分を別に不思議だとも思つてみなかつた。それだけに子供を生んだことのない母は孤獨だつた。



姉も母も君を独占したがう

君と姉とは年齢が十八違つていた。君はその年齢の差を大学に入学後も一度も疑つたことは無かつた。まして、父と姉が対等で、そこから君へと続く別の系譜が流れていようなどと思つて見たことすらなかつた。五歳の時、黒塗りの自動車、それまで病気で寝ていた姉を連れ去つたのを君は覚えている。当時君は姉が何処へ行ったのか分からなかつた。だが、それが自動車の色のように不安で、漠然とした遠いところのように思われた。

姉は、小高い丘に建つ国立結核療養所に入った。君が中学二年のとき、初めて母に連れられて姉の療養所に行った。マスクを無理やりさせられた。母はマスクを着けていなかった。十年ぶりで姉だという、その一重瞼の女を見た。姉は、母と君を交互に見比べながら

「まあ！」

いつたきり絶句するように暫く言葉を呑んだ。

君はこの女が姉だと信じられなかつた。髪の毛をおかっぱにして、色白でまるで日本人形のような女だつた。余りに可哀想で君は泣

その後、母と一緒に姉に会う度に、それほど頻りに会いにいったわけではないのだが……

この肌の白さが君の心に重く影を落とした。

その影が心深く内潜したことに気づかなかつた。滑らつこい手首の丸みから指先までの白

さもさることながら、とりわけ君が好き

だつたのは、姉が興奮に駆られた時にみ

せる、上気した頬に浮かべる透いて出る

ような血の赤味だつた。何時も頭の毛を

おかっぱにしている、知能の遅れた少女

のようにはしゃぎ、ふとした動作にもぎ

こちない様子をみせた姉が、この血の赤

味を見せるとき、どんなに君は姉をいと

おしく思つたことか。そんな時、言うに

言われぬ悲哀のような同情の感情で姉を

愛した。普段の姉は、こつこつとした愛らし

さは別の静かに微笑する女だつた。表

面にキラキラする女の性を決して見せない

かつた。その微笑が、透明な顔の上で一

寸引かれた唇の朱の色に調和し、心の中の灯

火の反映のように浮かんで消えた。

君は大学に入学後帰省時に、一度だけ母に

二人が、君のまわりを動いている他の女に対

ていた。二人とも、自分の内にあるその感情を互いに張り合うような闘争心で意識した。

して極度に神経を使っているのが分かつていた。だから君は、自分の関係している女のこゝとを二人に話すことは無かった。姉がこうした病気で独身？でいるからというわけでなく、何等説明し得ない感情が、そこにだんだんと鬱積していったように思える。それが不健康なしこりとなって抑圧されていた。

「雪、止んだかしら？」

千恵子は、指で乱暴にガラスを擦った。

「まだ降っているだろう。」

「いやだわ。」

雪国に生まれた千恵子が「いやだわ。」というのを奇妙に思った。雪はまだ降っていた。窓外に、黒い矢が流れて見えた。

「忘れていたわ。」

千恵子は目を上げるといった。君は闇の中の小さい点々が、窓外を流れて行くのを透かすように見ていた。

「あんた、バナナ食べる？」

「バナナ！？」

「ええ、先つき駅のデパートで買ったの。」

二人で食べたなら楽しいなと思つて・・・

思つて直ぐ買ったの。」

「バナナか・・・」

「嫌い？」

「いいや、もらつ。」

君は、千恵子の方を見ずにいった。千恵

子は自分のカバンからバナナの包を出すと、君に持たせたまま足が疲れるといつて、靴を脱ぎ、椅子の上に登り、畳の上に座るように足を斜めに揃えて座つた。

「私つておばあさんのようでしょう！」

「よかつたら、足をのばしてもいいよ。」

「この方がいいの。」

かぶりを振つた千恵子はまた笑つた。

千恵子の丸く滑らかな白い膝頭が見えていた。バナナは四本づつあつた。千恵子は、癖なのか一重瞼を瞬かせながら、もう二本目のバナナの皮を剥きかけていた。君は、先ほどから千恵子の健康な食欲に魅せられていた。何かからかつてやろつとして急に止した。

「ねえ、何を言おつとしたの？ いったー！」

千恵子は、食べながら幾分君を窺うように媚びると、わざとしかつめらしい顔をして君をじつと見詰めた。

「もう一本、僕のも上げるよ。」

千恵子は、外間もなく弾けるように笑い出した。千恵子は何か勘違いしたらしかった。

バナナが口から出そうになつて、慌てて口を押さえた。千恵子は胸に手を当てて、しばらく呼吸を整えるようにじつと俯いていた。

《どうして、こつもきざなんだ》 君は、

俯いている千恵子の黒い髪の毛に中央に、白いスツキリとした一本の線が通っているのに気付いて、はつとした。

その白い線に身体を屈めて、手で撫でて見

たくなつた。その線に沿つて指を動かしてみたくなつた。唇を押し当ててみたくなつた。君は、表面に勢いよく飛び出してきた衝動の強さにどぎまぎしていた。

千恵子は、口にほうばつたバナナを、やつと呑みこんで顔を上げた。

「あんた。私が食いしん坊なので驚いたでしょう。そつなの私つて食いしん坊なのよ。」

千恵子はそつという君の手から一本のバナナをひつたくつて皮を剥き、気負いこんで食べた。食べ終わるとしゃんと姿勢を正してみせた。するとどうだろう。髪の中にあつた白い線はそのまま千恵子の鼻筋を通つり、乳房の間を通つり、下腹部を通つり、タイトスカートの裾まできて、滑らかな白い丸い膝を分けると、そこで吸い込まれるように消えていた。急に千恵子に気持ちを読まれたように思った。向きを変えた黒い瞳が、じつと君の目に注がれていた。スチームの熱で千恵子の顔は上気していた。千恵子の濃い一重瞼の睫毛が震え、頬に淡い赤みが透いて出た。かち合つた眼中に、脈打つような興奮の流れを感じた。

君は言い訳がましく視線を外した。一度視線を外すと千恵子に見られているという意識で、膝の上に置いた手まで動かさなくなつた。指が麻痺した。そして手の内側に汗をかいた。君はそれをスチームの熱さのせいにした。もう一度、千恵子の顔におずおずと視線を流した。千恵子は目を伏せていた。千恵子の唇を

みた。唇は幾分湿りをおび、そして心持ゆつくりと開いていくように思えた。

千恵子は自分の感情を気取られまいとして眼を瞑った。眼を瞑ったままこわい雪女に变身していく自分の気持ちを抑えていた。千恵子は、ふつと息をついて眼を開いた。

「今日のおんたつて、ひどく疲れるわ。」

「……」

「どうしてかしら。」

「仕事で疲れたからだろう。」

「ちがうわ！ あんたが余り見詰めるからよ。黙つて観てばかり……」

君は、三本目のバナナの皮を剥くと、窓の外を見ながらゆつくりと食べ始めた。

× ×

放任主義の父は、表面では君に対して無関心に見えた。だが君が父を心配してように、父はそれ以上に君の事を心配していた。それは帰省した時、寢床から君を見上げる父の眼を見れば充分だった。君は父を軽蔑していると言っていた。表向き控えめな親戚の者も、裏に周れば父に対してはとて邪険だった。外部の人間も君をそのような人間と見ていたようだ。だが君は父を愛していた。君は無意識な強烈さで父を愛していた。少年期から父親を超えていく男の衝動を抑えながら、表面にそれを出して表現する術を知らなかった。君は、自分の性質が父の性質と酷似している

ことに気付いて、とても悲観していた。そして気質の類似性に漠然たる恐怖心を抱いていた。無論、自分も今に教員を辞めてからの父のように、やがて社会的無能力者になるかもしれないという不安であった。アレルギー体質から、今に気管支喘息の発作を起して秋から春に掛けて、何時も寝込むようになるかもしれないという恐れもあった。だがそれだけではなかった。はつきりしていないだけにその恐怖は募った。だからこそ君は父を軽蔑するような言動をし、内では自分でも分からないほど、憐憫にも似た強さで父を愛した。

君は、女の眼を一目みれば理解できるものだと思っていた。眼と眼の邂逅における一瞬のひらめきで判断した。その自分に備わっている天性の本能、直感を信じた。君は第一印象偏重だった。会って話してみなければ人は分からないものだという俗説は、信じなかった。そんなものを信ずるのは、感受性の鈍い人間のいうことだと決め付けた。君は自分の感受性の鋭さに自惚れていた。自惚れるだけでは満足せず、他人にもそれを認めさせた。認めない人間は頭の中で抹殺された。千恵子はそうした君の直感で知り合った女だった。街角の信号が赤だったとき、偶然知り合った一重瞼の女だった。信号が青に変わっても、二人は暫くじつと互いを見詰めていた。誰かに似てると、お互いが意識した。千恵子は、君と六センチしか違わなかった。そうしてい

る自分達に気付いて、二人とも顔を赤らめた。それで充分だった。この計画を思い付いたのも千恵子だった。君が年下であるという気安さもあつてのことだろう。君が帰省するとき、千恵子も一緒に汽車に乗る。そして好きなところで千恵子は下車する。君は夜行で帰るところにした。それを電話で聞いた時、千恵子は警戒したみたいだった。大学の寮をでる時も、その不安を感じた。千恵子は来るだろうか。来ないような気もした。

冷気を含んだ裏日本独特の冬の曇天の空から、今にも雪が降り出しそうだった。

× ×

「トンネルに入ったみたい。」

君が、バナナを食べ終わって長い沈黙の後言葉だった。窓外を、間隔をおいて電球の光が通過して行くのがその証拠だった。窓ガラスの水滴は全て流れ落ちて、ガラスの全面が一樣に濡れていた。小電球の光が通過するたびに、ガラスに映った千恵子の頬が規則的にパツト輝いていた。それは千恵子の心臓の鼓動のリズムのようだった。

「僕も何だか疲れて、眠いよ。」

「そう。」

千恵子は、椅子の上で膝を伸ばしたり、縮めたりして、二三次屈伸運動をした。そして靴を履いた。

「あんた、眠りなさい！眠っている内に、

私何処かの駅で下りるから。」

千恵子も君と同じ不安を抱きながら、それとなく別れをほのめかした。君は、自分の眼が千恵子から見られないように前額に当てて、眼を瞑った。眠れるものなら眠りたかった。それができたらどんなにか楽だろうと思った。ふと、静かに静かに控え目だが、心を込めて君の膝頭が圧迫されてくるのを感じた。全神経を膝頭に集中して君は目を瞑りながら感動していた。千恵子の心がその接触を通して痛みまでに感じられた。君も、静かに静かに心を込めて膝頭を押し出した。突然、千恵子は足をさっと引いた。

「私、次の駅で下りるわ！
友達の家があるのよ。本当は県境の駅まで一緒に行く積りだったんだけど……」

「そう。」

君は内心の動揺を隠して、いかにも自分は今眠たいのだという無関心さで応じた。だが、千恵子の心を傷つけることにはならないと思っ



拾付かない気持ちの乱れを恐れて止した。千恵子と一緒に自分も下車するかもしれないから。君は、眼を上げると許しを請うような調子の小声で言った。

「衝動をこのまま我慢することは、いいこと……なんだ……ね。」

千恵子も黙って頷いた。
「だが、余り我慢するのは、よくない……ことだ……ね。」

千恵子は、何かいおうとして唇を動かした。君は、今自分が何をいつているのか解らなかつた。解るのは、今自分が矛盾したことをいつているということだった。だが、そのまま自分の気持ちを表現し得たと思った。

汽車は大きくカーブをしていた。君は、そのカーブの向こうの雪の切れ目に点々と明滅する町の灯を認めた。だが平然としていた。

「あの町で下りるんだね。」

君は、窓の向こうにだんだんと近づいてくる町の灯を指差して言った。

「たぶん、そうね。」

千恵子も無関心にいつて立上った。君は何かが逃げていくような焦燥感を感じた。

「下りるんだね。」

「下りるのよ。」

千恵子は、オーバーを着て襟を立てた。君は手を差し出した。

「何時ものようにお別れだ！」

握った千恵子の手は、柔らかくしつとりと汗ばんでいた。手袋を持った手で、カバンを器用に持ちながら歩き出していた。歩いていく千恵子の横顔に、血の赤みが透いていた。千恵子は一重瞼を瞬かせながら、じつと前を向いていた。君も千恵子も、互いに相手を見ないで、相手の動作を想像していた。

汽車がのめって止まった。

千恵子は下りる直前でも君の方を見ないだろうと思った。駅で逢ったときのように、幾分尖った怖い顔でつんと澄まして……澄ましながらも、今にも君が後を追って一緒に下りて来るのではないかと不安がっていると思った。それが、千恵子らしいと思った。

君は、前を向いたまま座っていると、たつた今握手して別れたばかりの千恵子のごとは、すーと忘れていくような妙な感情に駆られた。それが何故だか自分でも解せなかつた。汽車は直ぐ発車した。小さい駅だった。

汽車は県境を抜けると、スピードを上げて走った。汽車の振動に合わせて、尻を横にずらすと二三発大きく放屁をした。すると家に帰るのだという実感が沸いてきた。

了

繪 梶谷忠大 京都大学工学部四回生 美術部員